



茨城大学教職員組合

委員長日誌

第13号 05/01/04

この1月から3月は本当に重要な時期だ、と思う。

失われた1年を取り戻すために

2004年が暮れ、2005年が明けた。

委員長日誌のことはいつも頭にあった。廊下ですれ違う教員や職員の何人かに、最近届きませんが、といわれていた。正直言って、前号が11月1日付であったのは、いま気がついた。2ヶ月以上も、ご無沙汰していたのだと。

頭のなかを書いて伝えたいことは、たくさんあった。週末になると、いつも書かなければと思っていた。しかし、疲れがたまって、土曜日と日曜日は、体が働いてくれなかった。

もちろん、教職員組合の組合活動は続いていた。いくつもの変化と前進があった。ただ、委員長日誌は書けなかった。なぜか、少しいい訳をさせてほしい。

まず、私にも教育義務がある。11月から12月は卒論指導が大変である。ゼミ生に、大学で勉強したんだという経験をさせるために、それなりに、厳しい指導をする。そのためには、時間が割かれる。この暮れから正月中も、パソコンには、卒論添付メールが届く。

つぎに、依頼原稿を書かなければならない。債務を履行しなければ、労働法学会で相手にされなくなる仕事もある。書きたい問題もある。考えることを放棄すると、書くという癖を失うと研究者でなくなる。だから、レジュメでもせせと貯める。

そして、社会的活動もある。茨城大学もひどいが、全国の大学はもっとひどい。国立大学法人化と労働関係について、東京を会場にして、全国の100近い大学・研究機関の教職員組合が参加する講演会で話をしている。北は北海道から南は沖縄まで、全国の大学に呼ばれた。また、民間労働組合では、最近、日本乗員組合連絡協議会や航空労組連絡会など航空産業の労働組合とつきあっている。労働現場から離れると労働法を研究する立脚点がぐらついてくる。現場でなにが問題となっているのか、労働組合員や組合役員はなにを考えているのか、こういうことを知らないと法律問題をきちんと伝えられなくなる。

そんなこんなで、委員長日誌を書けない日々が続き、2ヶ月が過ぎてしまった。

さー！ 年明けとともに、委員長日誌の再出発である。ご期待に添えるようにに（だれも期待していないぞ、という声も聞こえるが）できる限り、定期的に発行していく。

さて、前学長のもとでの失われた一年は、本当に大きかった。一昨年の8月であれば、まだ、立ち止まって考えることができた。しかし、現学長体制では、走りながら考えなければならない。失われた一年をつくり出したのは、前学長ひとりの責任ではない。そうした時を与えてしまった私たち教職員の責任でもある。政治が悪い、しかし悪い政治をつくり出した政治家を選挙で選んだのは、多数派を占める国民である。多数派を変えられぬ少数派の国民の問題でもある。主体的に考えるということは、そこまで突き詰めることである。失われた時間は戻らないが、いまの時間を有効に使うことによって、実質的な意味で、時間は取り戻すことができる。

それでは、国立大学法人制度のもとで、茨城大学が、地域住民に信頼され、全国に誇れる大学として継続的に発展していくために、なにをしなければならないのか。

そのためには、現状を徹底して分析し、問題点を洗い出し、課題を析出し、課題の政策的優先順位を決定し、その実現のために必要とされる制度改革の実行と人的な配置と財政的な措置を実行することである。もちろん、このプロセスでは、全構成員自治にもとづく民主的な手続きが履践されなければならない。

私は、財務会計制度の確立、教育サ・ビス体制の改善・改革、学部学野制度の確立、大学運営体制の改革、事務職員制度の改革、が中心的な課題であろうと考えている。これらは、核心的課題である。もちろん、広範囲な研究教育と大学運営をめぐる課題は山積している。

私も、委員長日誌などで、これから具体的な提案をしていく。みなさんも、具体的な提案をしていただきたい。それらを、nfukaya@mx.ibaraki.ac.jp か、JDM00736@nifty.ne.jp へ

[情報化社会を実感する辺境の地にて 05/01/04 am 1:00]